



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。 <http://www.amsl.or.jp>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@oki-zamami.jp



●クマノミの住宅難？

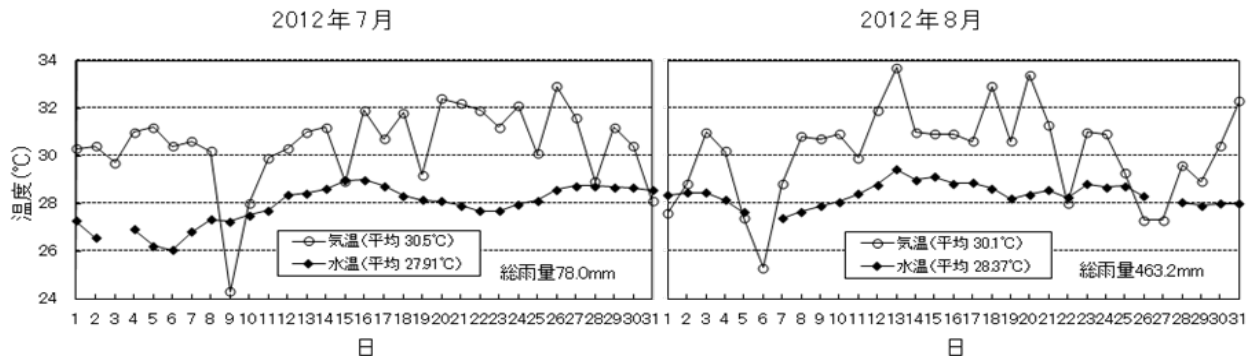
ー大型イソギンチャクの繁殖ー

太陽の力も少し弱くなり、季節の変わり目を感じるようになってきました。研究所では9月にはサンゴの産卵調査はおこなわなかったのですが、アヒコダイバーズの安彦さんから月始め(3日?)にマジノハマで被覆状のコモンサンゴが産卵したと教えてもらいました。夏の間産卵していたサンゴも、多くのものは9月の満月前後で繁殖期を終えるだろうと思いますので、これはとても貴重な情報でした。この夏も夜の海でたくさんのサンゴやほかの生き物の繁殖の様子を見ることができましたが、実はおととしと去年の調査の時には、以前(アムスルだよりNo.103)「見たい」と話していたクマノミのすむイソギンチャクの産卵を観察しましたので、今回はその話をしたいと思います。

クマノミのすむ大型イソギンチャクの

繁殖が海中でめったに見られないことは、以前にアムスルだより(No.103)でお話ししたとおりです。数年の間、まったく見るができず、ようやく観察できたのが、おととし2010年の8月、シライトイソギンチャクでのことでした。調査中になんとなくイソギンチャクの様子がいつもと違って感じるように感じたので、じっと目をこらしてみたらところ口から卵が産み出されていたのです。そして、翌年はもっとくわしく観察することができました。シライトイソギンチャクは、いつもは岩のすき間にうもれるように入っていて大きく広げた触手と口盤(口のまわりの部分です)が見えているだけですが、産卵する時には岩から身をのりだすように体を伸ばすのです。そして、オスは精子を、メスは卵を、それぞれの口から外へ出します。その時産み出された卵をいくつか採集してきて顕微鏡で見ると、色は深緑色ですでに褐虫藻があり、直径0.5~0.7mmほどでした。近くでオスが放精していたので、「もしかしたら」と期待していたのですが、卵は見事に受精していてプラヌラ幼生になりました。けれども、最初に約90個体いた幼生は次々に死んでいき、残念なことに4日後にはほとんどいなくなっていました。そして、ようやく生き残った1個体だけがおよそ10日後に基盤の上で子どものイソギンチャクになりました(写真1)。たくさんの幼生が死んでしまうのは今回だけの

定点観測



特別なことなのか、それともいつも起きることなのかはまだわかりませんが、これまでところ、世界的に見ても人工的に

殖やすことに成功した例はわずかですし、もしかしたら、海中で小さなイソギンチャクの子どもを見かけない



写真1
子どものイソギンチャク

理由の一つは、自然の中でも生まれて間もないイソギンチャクのほとんどが死んでしまうためなのかもしれません。また、長期間観察していても、イソギンチャクの数が急に増えることがないのは、イソギンチャクの殖える力があまり強くないからだろうと思います。そう考えると、海底で大きく伸びてゆったり暮らしているイソギンチャクは、とても貴重な存在と言えるでしょう。

ところで、イソギンチャクにすむクマノミはとても人気のある魚ですが、数年前、オーストラリアなどで深刻な減少の危機に落ちいったことがあります。それはクマノミが主人公のアニメ映画「ファインディング・ニモ」がヒットしたあとで、多くの人がクマノミを飼いたがり、たくさんのクマノミが海から獲られてしまったことが理由の一つと考えられています。また、その時には同時にイソギンチャクも乱獲され、沖縄でも同じ被害が

報告されました。先ほど書いたように、殖える力の弱いイソギンチャクですから、獲られてしまうとどんどん減るいっぽうです。イソギンチャクが減ると、いっしょに暮らすクマノミたち、そしてその他のミツボシクロズメなどの魚たちやエビやカニダマシもすむところなくなって数が減っていく、というように悪い影響はさらに広がることになってしまいます。

海の生き物が好きで興味を持っている人たちが、逆に生き物たちに被害を与えることになってしまうという悲しい話です。本当に生き物のことを好きで興味があるのならば、いったいどうするべきかを良く考えなければならないと思います。

● 阿嘉島の海より

旧暦の6月15日(新暦では8月2日)、阿嘉島では海での航海安全と豊漁を祈願する海神祭が行われました。この行事には全身を真っ黒に塗り、黒い着物を着た若者が登場し、「スクドーイ、グルクンドーイ」と叫んで大漁を祈願します。今年は台風の影響で中止になりましたが、例年ではこの後、島の若者がハーレー船を漕いで慶留間島まで行きます。これはもともと島のノロさんが慶留間島へ行く際の護衛船でした。

